

教理研究院

サンクチュアリ教会およびUCIを支持する人々の言説の誤り(23)

教理研究院は、UCI（いわゆる「郭グループ」）側が広める金鍾奭著『統一教会の分裂』の内容が、み言の改ざんや意図的とも言える誤訳、文脈を無視したみ言の引用などによる、虚偽のストーリーであることを指摘してきてました。

これまで、「統一教会の分裂」が「韓鶴子の不従順」（245ページ）を裏づける、み言として引用している十八個のみ言のうち、すでに四つに対し、それらが、虚偽の主張である事実を明らかにしました。今回は、「統一教会の分裂」が「韓鶴子の不従順」を裏づけるみ言として最初に引用している一九九九年十月十五日のみ言に対し、その、虚偽を明らかにします。

なお、これらの内容を総合的に理解し把握するためには、「真の父母様宣布文ウェブサイト (https://trueparents.jp/)」の掲載文や映像をごらんください。

教理研究院

注 真の父母様のみ言および家庭連合の公式発表は「青い字」で、UCI（いわゆる「郭グループ」）側の主張は「茶色の字」で区別しています。

二十七、サタンは真の子女様を狙っている

——真のお父様の預言

「春が来れば、みんな解けるようになります」

(1)「韓鶴子の不従順」を裏づける、み言は存在しない

『統一教会の分裂』は、真のお父様が「韓鶴子の不従順」に対して苦慮しておられるみ言であるとして、次のようにみ言を

引用します。

真の父母様宣布文ウェブサイトはこちらから↓



「エバがこのようなことを知っていたら復帰されていたのにといいのです。今、お母さんが一人出てきたらどうしますか。お母さんも絶対信仰・絶対愛・絶対服従です。自分を中心としたお父様への絶対信仰・絶対愛・絶対服従ではありません。その時までお母さんは絶対について来なければならぬということです。〈中略〉ここにいますお母様が自分の考えを持って巣をつくるようになれば、問題が大きいということです。〈中略〉今、完成時代に入って、お母さんが責任を果たせなければお母さんの後継者はいくらでもいっぱいいるのです」(246ページ)

態度」(245ページ)に言及したみ言であると述べます。しかし、これは、虚偽の主張です。ここで語られている「お母さんが責任を果たせなければお母さんの後継者はいくらでもいっぱいいるのです」という内容は、後述しますが、その当時の母の国、日本について触れているものです。『統一教会の分裂』は、上記に続く重要な部分を削除し、隠蔽しています。真のお父様は、続けて次のように語っておられます。

「それで、最後に今回、賞をあげました。父母様の賞が一つの決定的基盤なのです」(マルスム選集312-1177。翻訳は教理研究院、以下同じ)

『統一教会の分裂』は、「創始者を不信する韓鶴子の態度」が「事実」であるかのように印象づけるために、真のお父様が苦

慮しておられたかのようにみ言を恣意的に引用し、「それで、最後に今回、賞をあげました。父母様の賞が一つの決定的基盤なのです」という総括的なみ言の部分削除し、自分たちに都合良く解釈しているのです。このみ言は「韓鶴子の不従順」とは全く関係のないものです。

まず、『統一教会の分裂』が、意図的に隠蔽した「最後に今回、賞をあげました。父母様の賞が一つの決定的基盤」と語られた「父母様の賞」とは何であるのかを明確にしておかなければなりません。

一九九九年六月十四日(天暦五月一日)、真のお父様は「真の父母様宇宙勝利祝賀宣布」の式典で、真のお母様に「表彰牌」を授与されました。お父様が語っておられる「父母様の賞」とは、その「表彰牌」のことで、お父様は、式典で次のように語っておられます。

「八十か都市で勝利の基準を持つて帰ってきたので、お母様はついに、お母様としての責任を果たして、神様が公認される位置に、サタンが公認する位置に、真の父母と人類が公認する位置に立ち、キリスト教人口の氏族圏を超えた勝利の版図に立ったのです。……文総裁からお母様に対して、韓鶴子女史に対して表彰をするのです。今からは、対等な立場なのです」(『ファミリー』一九九九年八月号、20ページ。太字ゴシックは教理研究院)

真のお母様は、一九九九年に「真の家庭世界化前進大会」で講演され、「八十か都市で勝利の基準」を立てられました。それに対し、真のお父様は「お母様としての責任を果たして……真の父母と人類が公認する位置」に立たれたと語られ、お母様に

「表彰牌」を授与されたのです。その「表彰牌」には、「あなた(真のお母様)は……蕩滅復帰の苦難の路程を絶対信仰、絶対愛、絶対服従で勝利し、永遠の伝統を立てられました」(『真の父母経』1440ページ)と刻まれています。「真の父母様宇宙勝利祝賀宣布」は、お母様が「蕩滅復帰の苦難の路程を絶対信仰、絶対愛、絶対服従で勝利」したことを天と人類の前に宣布し、祝賀した式典でした。

ところが『統一教会の分裂』は、「あなた(真のお母様)は……蕩滅復帰の苦難の路程を絶対信仰、絶対愛、絶対服従で勝利し、永遠の伝統を立てられました」(『真の父母経』1440ページ)と刻まれています。「真の父母様宇宙勝利祝賀宣布」は、お母様が「蕩滅復帰の苦難の路程を絶対信仰、絶対愛、絶対服従で勝利」したことを天と人類の前に宣布し、祝賀した式典でした。

『統一教会の分裂』が引用した一九九九年十月十五日のみ言は、真のお父様が「韓鶴子の不従順」に対し「創始者の苦心」(246ページ)を語られたものではなく、真のお母様に授与された表彰牌が、「蕩滅復帰の苦難の路程を絶対信仰、絶対愛、絶対服従で勝利」されたものであり、「真の父母と人類が公認する位置」に立つ「決定的基盤」となっていることを証ししてお

「先生のお父様は「先生のお母様でも、サタンが侵犯できる許諾を全部してあげたのです。それで、ありとあらゆるものが、全部起こったのです。(かつて)孝進を見てみ

「先生のお母様でも、サタンが侵犯できる許諾を全部してあげたのです。それで、ありとあらゆるものが、全部起こったのです。(かつて)孝進を見てみ

れば、孝律のほおを殴り、あの野郎、みんな殺すと。全部みんな、息子たちがそうです。……(今後) 顯進や國進までも、こじきみたいなやつたちを殴り殺さなければならぬというのです。……(しかし) それで自分の心ではないのです」(マルスム選集312-179)

真のお父様は、「先生の家庭までも、サタンが侵犯できる許諾を全部してあげた」ので「サタンが侵犯」し、真の子女様において「あらゆることが、全部起こった」と語っておられます。また、子女様たちの心に、あまりにも至らない家庭連合の食口に対し、「こじきみたいなやつたちを殴り殺さなければならぬ」という思いが生じたりするということです。しかし、そのような子女様の思いは「自分の心ではない」と語っておられます。さらに、真のお父様は、文孝



「真の母およびカイン・アベルー一体化の特別式」
(2008年4月6日、米国・ハワイ)

進様の聖和後、二〇〇八年四月六日の第四十九回「真の父母の日に」、ハワイで「真の母およびカイン・アベルー一体化の特別式」を挙行され、ご自分の前に文顯進様と文國進様を立たせ(写真)、次のように語ってお

れます。

「あなたたちカインとアベルが、お母様の言葉に絶対服従しなければなりません。……」

て、真の父母様のご家庭の「居間にまで入ってきて傷をつける」事件が起こりうるということです。

②サタンが「居間にまで入ってきて傷をつける」事件

一九九九年十月二十七日、六男の文榮進様がホテルのバルコニーから転落し、聖和されました。それは、真のお父様が「先生の家庭までも、サタンが侵犯できる許諾を全部してあげた」と語られた日から十三日目の出来事であり、サタンが真の父母様の家庭の「居間にまで入ってきて傷をつける」と語られた後に起こった最初の事件でした。真のお父様は、榮進様の聖和について次のように語っておられます。

「父母が、カイン世界を救うために犠牲になったのと同じように、興進君と靈界に行っている四人の子女たち(文喜進様、

あなたたち兄弟同士で争って分かれることはできません。……われ知らず憎みます。声を聞くのも嫌で、歩いていくのを見れば、後からついて行って殺したい思いが出てきます。あなたたちに、われ知らずそのような思いが出てくるということです。かつて孝進がそれを体験し、いけないということを知っているのです、兄弟たちに接することができず、父母様に反対し、父母様でも何でも、すべてなくしてしまおうと考えたというのです」(『ファミリー』二〇〇八年六月号、30ページ)

真のお父様は、顯進様と國進様に対し、兄弟同士が「われ知らず憎みます。声を聞くのも嫌で……殺したい思いが出てきます。あなたたちに、われ知らずそのような思いが出てくる」と語られました。かつて孝進様もそのような思いを体験され、「父

文惠進様、文興進様、榮進様)は、皆、自分の持つて生まれた寿命を全うできずに、途中で急死した人々です。皆、事故死です」(『ファミリー』二〇〇一年二月号、17ページ)

真のお父様が「靈界に行っている四人の子女たちは、皆……事故死です」と語っておられるように、榮進様の聖和は「事故死」によるものだったのです。さらに、お父様は次のように語っておられます。

「榮進が家を出るとき、勉強すると手紙を書いておいて行きました。自分の複雑な環境から新たに決心して、勉強するという手紙を書いておいて行きました。ラスベガスにいて、ネバダに行つてその都市の名前は何ですか? (リノです) リノのハラーズホテル十七階二三号室で事故に遭つたのです。それを自

母様に反対し、父母様でも何でも、すべてなくしてしまおう」と「われ知らずそのような思いが出てくる」ことがあったと述べておられます。

真の子女様の心に、互いに「殺したい思い」が出たり、「父母様に反対」する思いになったりするのは「自分の心」ではなく、「われ知らずそのような思いが出てくる」からだと言われました。だからこそ、真のお父様は子女様に対し「お母様の言葉に絶対服従しなければなりません」と忠告しておられるのです。これは子女様をサタンから守るためです。

また、真のお父様は一九九九年十月十五日のみ言で、次のようにも語っておられます。

「み目のためにいちばん近い側近者が(真の父母様を)背信します。先生の息子の中にも背信した者が出てくるのです。先

殺と見ることはできません。事故と見るのです」(マルスム選集312-237、238、一九九九年十一月二日)

榮進様は、「自分の複雑な環境から新たに決心して、勉強するという手紙」を書いて家を出発されました。真のお父様は、新たな決心を出発された榮進様は「事故に遭つた」と語っておられます。

そして、真のお父様は靈界の実相からも、榮進様の死が「事故」であることを次のように語っておられます。

「靈界の実相を知れば、靈界では、自殺した人が入っていくと、神様のみ旨の前に出て協助することはできません。涙を流しながら『わたしの責任を果たせる兄弟たちを助けてほしい』と祈禱し、父に対してその事情を語る榮進、その息子を見ると

真のお父様は「先生の息子の、中にも背信した者が出てくる……離婚して一緒に住めないというこまで出てくる」と語られ、真の子女様に今後、起こりうるさまざまな問題について言及されました。

このように、真のお父様が

「先生の家庭までも、サタンが侵犯できる許諾」をされたので、サタンの讒訴条件が残っていたれば、サタンが真の子女様を狙つ

き、これは自殺ではありません。自殺ではないのです。自殺した者は先生の前に現れることができません」(『ファミリー』二〇〇九年九月号、7ページ。太字ゴシックは教理研究院)

自殺して霊界に行った人は「神様のみ旨の前に出て協助」できないだけでなく、「先生の前にも現れること」ができません。ところが、榮進様は真のお父様の前に現れ、「わたしの責任を果たせる兄弟たちを助けて



1999年10月27日に聖和された文榮進様の世界聖和式 (1999年11月12日、韓国、リトルエンジェルズ芸術会館)

ほしい」と祈禱し、事情を語られたのです。このように、霊界の実相から見ても、榮進様の死は「事故死」でした。真のお父様は、真の子女様の「事故死」の原因について次のように語っておられます。

「事故が起きたのですが、それが運転していたのかというところ、自分たちではなく、皆さん(食口)が間違った環境をつくり、皆さんが間違った運転をし、皆さんによって、そのような事故が起きたという事を知らなければなりません。……」

神様と真の父母様に重荷を負わせたという恥ずかしい事実を知らなければなりません」(『ファミリー』二〇〇一年二月号、17〜18ページ)

真のお父様は、榮進様の「事故死」は「皆さん(食口)が間違った環境をつくり、皆さんが

間違った運転をし、皆さんによって、そのような事故が起きた」のだと語られました。すなわち、真の子女様に対し、カイン圏の食口たちが「間違った環境」をつくることで、「先生の家庭までも、サタンが侵犯」できる条件となり、榮進様の転落事故という胸痛い事件が起きたのです。

実は、榮進様が事故に遭われた原因は、母の国である日本にもありました。

一九九九年、真のお父様は二〇〇〇年までに摂理を完結させるための最後の一年として、三億六千万双の祝福式を日本で挙行される計画をお持ちであり、当時の会長はお父様から、日本に「入国できるように政府と交渉」(『世界家庭』二〇一六年九月号、75ページ)するようという願いを受けていたのです。

一九九九年一月一日、「神の日」の式典が南米で行われ、引

き続き会議があり、真のお父様は日本の会長(当時)に「先生が入国できるように政府と交渉ができたのか」(同)と確認されました。会長が「申し訳ありません。まだできていません」と答えると、お父様は深刻になられ、「先生を入国させなければ、日本は母の国の立場を失い、めちゃくちゃになってしまう」(同)と厳しく言及されたのです。

正に、そのときの母の国、日本は、真のお父様が「お母さんが責任を果たせなければお母さんの後継者はいくらでもいっぱいいる」と語られたように、他の国(カナダ、フィリピンなど)に母の国の使命を譲らざるをえない状況に陥っていたのです。

結局、真のお父様のご入国問題は解決されず、三億六千万双の祝福式は日本で開催することができませんでした。お父様が「母の国の立場を失い、めちゃくちゃになってしまう」と

語られたように、母の国、日本は「間違った環境」をつくり、サタンに讒訴条件を握られてしまったのです。そのため、お父様は、「それで、最後に今回、賞をあげました。お父様の賞が一つの決定的基盤なのです」と

語られ、今後、サタンが「真のご家庭の」居間にまで入ってきて傷をつける」事件が起こることがあったとしても、真のお母様に授与された「賞」が「決定的基盤」となっている事実を明らかにされ、日本および真の子女様が真の父母様にしっかりとつながっていないならばならないことを語っておられたのです。

同年八月一日、真のお父様は日本人国家メシヤに対し、「全員オリンポに集合」(同)しなさいと指示され、百二十人が集まって四十日修練会が開催されました。その修練会の最後の頃、お父様は「全員ここに残れ。もう日本に帰る必要はない」(同)

と、日本に対する深刻な思いで国家メシヤたちに語られました。

そのような中、一九九九年十月二十七日、榮進様がホテルのバルコニーから転落する「事故が起きた」のです。この事故は「間違った環境」のゆえにサタンが讒訴し、真の父母様のご家庭の「居間にまで入ってきて傷をつける」出来事だったのです。

私たちは、一九九九年に日本で祝福式を挙行できなかったために榮進様の犠牲があった悲しみの歴史を知って、「神様と真の父母様に重荷を負わせた」ことを悔い改め、ビジョン二〇二〇までの最後の一年、氏族圏に祝福を伝授し、蕩滅復帰しなければなりません。

③希望の預言

「春が来れば、みんな解ける」

二〇一九年一月現在、顯進様、國進様、文亨進様は真の父母様の主管圏から離れ、非原理的活

動を行っています。真のお父様はこのような状況になることを、すでに一九九九年十月十五日のみ言で「先生の息子の中にも背信した者が出てくる」と預言しておられたのです。しかし、お父様は次のように語っておられます。

「顯進や國進までも、こじきみ、たいなや、つたちを殴り殺さなければならぬというのです。盗賊野郎のやつら、全部みんな信じる事ができないというのです。そのようなものです。(しかし)それが自分の心ではないのです。峠を越えるようになれば、春が来れば、みんな解けるようになります。それは神様の愛と、お父様の愛の、春の季節を迎えることによって解けるの

であって、その前にお父様と神様がカインを救うための、カイン(のための)愛の時代でしょう? ……ありがたいことは、サ

タンが先生の息子、娘をむやみに拉致できません。ありとあらゆるうわさはみんな出したけれども、(息子、娘を)捕まえて殺すことができます」(マルスム選集312-179〜180)

真のお父様は、サタンの讒訴ゆえに真の子女様に関するさまざまな問題が起きたとしても、「峠を越えるようになれば、春が来れば、みんな解けるようになります」と語られました。すなわち「お父様と神様がカインを救うための……愛の時代」を超えてこそ、春が来て、みんな解けるようになることを言及しておられるのです。

また、一九九八年九月二十一日、真のお父様は次のように語っておられます。

「国家メシヤたちには高級な服を買ってあげながら、自分の子女たちを連れて行って(その

ような)服を買ってあげたことは一度もありません。……(カイン圏の)外的な世界の人たちに愛を与えていたら、自分の家族が悲惨になってしまいました。先生はどのように考えるかというところから、『愛の祭壇を世界化する仕事を私がする』と考えるのです。……祭物を捧げる時には、家庭祭物を捧げなければなりません。父母様が祭物にならなければなりません。父母様自体が、食口自体が、祭物にならなければなりません。一番近いところから、神様は復帰摂理の祭物としてこられたではないですか！

統一教会員たちはそれを知っている、自分(お父様)の背に乗って越えていかなければなりませんでしたし、踏んで越えていかなければならないと考えるのです。……祭物なので、全世界の人類が、その祭壇の前

で(頭を下げ)敬礼を捧げなければならぬのです。

御旨がすべてなされた後……私たちの家庭を、世界の家庭がどれくらい尊敬するか、考えてみてください。償わなければなりません。全人類が、全世界が、私たちの家庭に感謝する日が来るということ(今は、皆さんは)知りません。……

五十年の歴史を過ごしながら、すべて悲しみで埋められていたので、それを越えて来ることのできない環境にあるのが、先生の家庭であることを知らなければなりません。家庭的祭壇を積んで摂理してきたことを知らなければなりません」(『祝福家庭』一九九八年冬季号、25頁26ページ)

真の父母様は、「カイン(世界)を救うため」に、より近い真の子女様を犠牲にしながら「カイン圏の)外的な世界の人

たちに愛を与えて」こられました。真のお父様が「五十年の歴史を過ごしながら、すべて悲しみで埋められている……先生の家庭である」と語られたように、真の父母様は最も愛する子女様を犠牲の祭物として捧げながら、「家庭的祭壇を積んで摂理」を導いてこられたのです。

今日における真の子女様の非原理的行動は、食口の不足な歩みによって生じた結果であり、「サタンが侵犯」し、真の父母様のご家庭の「居間にまで入ってきて傷をつける」ことが起こりうる讒訴条件によるものです。正に、サタンが子女様を拉致して悪事を働こうとしている姿だと見えるのです。しかし、サタンは子女様を「捕まえて殺すこと」はできません。私たちは真の父母様を「踏んで越えていかなければならない」み旨の道において、今までの私たちの不足、サタンの讒訴圏を清算すること

で、子女様を本来の位置に取り戻してこなければならぬのです。

真のお父様は「御旨がすべてなされた後……全人類が、全世界が、私たちの家庭に感謝する日が来る」と語っておられます。すなわち、最後の「峠を越えるようになれば、春が来れば、みんな解ける」ようになり、真の父母様のご家庭は、全世界の人々から愛され尊敬されるようになるというのです。そうしてこそ、「家庭的祭壇を積んで摂理して」こられた真の父母様の「恨」が解かれるのです。

二〇一二年天曆七月十七日(陽曆九月三日)、真のお父様が聖和された後、真のお母様は「中断なき前進」を宣布され、ビジョン二〇二〇勝利のために死生決断で歩んでおられます。お母様は同年十二月九日、次のように語っておられます。「私たちに中断はありません。

前進があるのみです。全世界の真の家庭の皆さんが、絶対信仰、絶対愛、絶対服従によって新(神) 民族的メシヤの使命を果たし、天の大いなる恩賜と天運を相続する勝利者になることをお祈りいたします。天は、私たちに途方もない祝福を下さいました。その責任は、必ず私たちが、皆さんが、二世たちが完成しなければなりません」(天一国経典『天聖經』1368ページ)

真のお母様は、「カイン(世界)を救う」ために、全世界の祝福家庭が「絶対信仰、絶対愛、絶対服従によって新(神) 民族的メシヤの使命を果たし、……勝利者になること」を訴えられ、中断なき前進を訴えておられます。お母様は「二〇二〇年まで、この国の復帰と世界の復帰のために……心を一つにし、志を一つにして、この目的を達成」(『真の父母経』572ページ)

しななければならないと語られ、「新(神) 民族的メシヤ」の勝利を何度も強調しておられるのです。

また、真のお母様は、二〇一四年二月九日、次のように語っておられます。

「二〇二〇年まで、私(お母様)が天のみに約束したことがあります。それが必ず成就するよう、多方面で環境創造をするつもりです」(同1065ページ)

このように、真のお母様は「二〇二〇年まで、私(お母様)が天のみに約束した」ことを果たすため、「環境創造」をしていき、天の父母様(神様)のみ旨を必ず成就する決意で歩まれています。

私たちはそのような真のお母様と「心を一つにし、志を一つ」にして、「新(神) 民族的メシ

ヤの使命」を果たさなければなりません。そして、一九九九年に三億六千万双の祝福式を日本で開催できなかった真のお父様の「恨」を、二〇二〇年までの最後の年に解いてさしあげなければなりません。

真のお父様が「峠を越えるようになれば、春が来れば、みんな解けるようになります」と語っておられるように、正に今がその「峠を越える」ときのなのです。

一九九九年十月十五日のみ言は、真のお母様の心情、事情、願いと一つになって、祝福家庭が「新(神) 民族的メシヤの使命」を果たし、摂理的な春を迎えるようになれば、真の子女様の問題は全て「みんな解ける」という、希望のみ言、預言の内容です。

『統一教会の分裂』は、一九九九年十月十五日のみ言が「韓

鶴子の不従順」を裏づけするものだと主張しますが、そのみ言を検証してみると、真のお母様が「絶対信仰、絶対愛、絶対服従で勝利」されたというみ言、および「息子の中にも背信した者が出てくる」という真の子女様に関する預言の部分、そして「春が来れば、みんな解ける」という希望のみ言などが隠蔽されています。つまり、この書籍は、真のお父様が語っておられる真意をゆがめ、虚偽の主張をしていっているのです。

ビジョン二〇二〇に向けて、今が正に「峠を越える」最後の時です。私たちは、不信をあおろうとする「虚偽の主張」に惑わされず、天の父母様と真の父母様に対する「絶対信仰、絶対愛、絶対服従」で一致団結し、神民族メシヤを勝利すること、真の父母様の「恨」を解放してさしあげなければなりません。